

日本語の記述に関する予備的考察¹

和泉 悠

Ⅰ 序論

英米哲学の文脈において、確定記述 definite descriptions とは、定冠詞と名詞句を組み合わせたものであるとみなされる。例えば *the queen of England* は確定記述である。これは形に基づいた確定記述の定義であり、意味に基づいた定義ではない。すなわち、どのような意味を語句が示していようとも、その姿形に基づいて、該当の語句は確定記述であるか否か判断されるのである。ラッセルも「表示について」においては、形に基づいた定義を提示しているように思われる²。ラッセルは、「表示句」と呼ばれるべき語句を並べ、確定記述はそのうちの一つであるとする。そして語句は「その形のせいのみによって表示する」(Russell, 1905, 478, 強調原文)と述べるのである。ラッセルが何を意図したにせよ、英語で書かれた哲学文献において確定記述が語られる際、形に基づいた定義が前提とされているように思われる。

しかし、形に基づく確定記述の定義は明らかに問題を抱える。それは、世界の諸言語の多くは定冠詞を持たない、ということである。620 に及ぶ言語の比較調査によると、日本語やポーランド語など、そのうち少なくとも 200 以上の言語は定冠詞を持たない (Dryer, 2011, Ch. 37)。もし形に基づく確定記述の定義をこれらの言語にあてはめると、これらの言語は確定記述を一切持たないこととなる。

日本語に確定記述は存在しない、という主張をわれわれは受け入れるべきではない。第一に、「イギリス女王」「最も大きな素数」「マティーニを飲んでいる男」といったような語句は、冠詞こそ持たないが、英語の確定記述と同じ役割を果たすことがある。この点については後で議論を深める。第二に、もしラッセルが主張するように確定記述の存在がなんらかの認識論的あるいは形而上学的帰

結を生むとするならば、たんに日本語話者であるということだけから、なんらかの認識論的・形而上学的帰結が導かれることになってしまう。日本語話者であることやチェロキー語話者であることがそうした帰結を生むかもしれない、という言語相対主義的な可能性をここでは議論しない。定冠詞を持たない言語は地球上に非常に幅広く分布しており、歴史・文化・環境に関する相関関係を見出すのは極めて困難であろう、とだけ述べておく。

さて形に基づく確定記述の定義を斥けたとき、日本語やその他定冠詞を持たない言語における確定記述とは一体何なのだろうか。日本語において、そもそもどの表現が確定記述なのだろうか。またもっと重要なことに、定冠詞を持たない言語において確定記述とみなされる表現の意味をどのように分析すべきなのだろうか。哲学文献の中では、こうした問いはいくつかの例外を除き、英米・日本双方においてあまり活発に議論されてこなかった³。本稿の目標はそのギャップを埋めるきっかけを与えることである。

まず、日本語においては裸名詞句、すなわち冠詞、量化表現(e.g., 「すべての」),そして指示詞(e.g., 「この」)によって修飾されていない名詞句が英語の確定記述のような働きを示す、ということを見ておこう。

- (1) 一匹の黒い猫が部屋に入ってきた。黒い猫は僕の膝の上に座り込んだ。
- (2) 2007年に就任した阪大の総長が書評を書いた。

上記の文章において強調された「黒い猫」と「2007年に就任した阪大の総長」は冠詞や量化表現などを持たない裸の名詞句である。しかし、双方の文とも唯一の対象に関する文であるように思われる。最もありそうな解釈によると、(1)の二番目の文において語られる黒い猫は、文脈における部屋に入ってきたところの黒い猫であり、世界中に存在するその他の黒い猫ではない。(2)も特定の一人の人物について語っているように思われる。唯一の対象について語るために用いられる、というのは英語の単数確定記述が持つ役割と同じである。このため以下では、日本語の裸名詞句が英語の確定記述にあたる表現である、という考えを検討していきたいと思う。

裸名詞句が確定記述にあたる表現だとすると、ラッセルの記述の理論、あるいは他の確定記述の分析⁴を日本語の裸名詞句にもあてはめるべきなのだろうか。ことはそう単純ではない。というのも、日本語裸名詞句は英語の確定記述のような役割を果たすのみならず、不確定記述 *indefinite descriptions*、さらには裸複数名詞 *bare plurals* のような働きも示すからである。以下の文に現れる「犬」はどれも量に関して修飾されていない裸の名詞句である。しかし、(3-4)の自然な読みは、不特定の一匹の犬、あるいは不特定の数匹の犬に関するものである。すなわち、(3-4)における名詞句は英語の不確定記述のような役割を果たしている。また、(5)は特定の犬や数匹の犬に関する文ではなく、犬という種全体に関するものであり、(6)も大多数の犬、あるいは犬全般に関する文である。(5-6)における用法は英語の裸複数名詞において見られるものである。しかし(1)で見たように、「犬」といった名詞句は特定の対象について語るために、すなわち確定記述のようにも使われるのである。

- (3) 林太郎は犬を飼っている。
- (4) 犬がどこかで吠えた。
- (5) 犬が絶滅した。
- (6) 犬が吠えるのは当たり前だ。

裸名詞句のこうした様々な用法をわれわれはいかにして説明すべきなのだろうか。この問いに対する一つの答えとして、第二節において、ラドロー＝シーガル（以下 L&S）によって提出された確定記述・不確定記述の統一的分析を批判的に検討する。第三節では、日本語の裸名詞句に関する経験的な議論が哲学的な帰結を生む、ということを主張する。

II ラドロー＝シーガルによる記述の分析

L&S (Ludlow and Segal, 2004) の最終的な目標は、冠詞の有無を問わないような記述の分析を構築することである。しかしながら英語などの多数の言語にはもちろん定冠詞・不定冠詞が存在する。そこで L&S が採用した基本的な方針は、

英語の冠詞にはそもそも意味論的な区別は存在しない、とみなすことである。すなわち、定冠詞 *the* と不定冠詞 *a(n)* の間には、意味論的な差が存在せず、確定記述と不確定記述は同じ意味論的値を持つ、と主張したのである⁵。もしこの主張が正しいとすると、日本語などの言語において冠詞が存在しないのもうなずける話となるかもしれない。英語においても、*the* と *a(n)* は少なくとも意味論的には同じであり区別される必要がない。ならば他の言語が、そうした意味論的には必要のない区別をわざわざ表現しない、ということはあるらしいことである。

もっと具体的に L&S の分析を検討していこう。L&S の分析は意味論的な部分と語用論的な部分に分かれる。まずは彼らの意味論的な主張を説明する。L&S によると、ラッセルの不確定記述の意味論的分析が、英語の確定・不確定記述双方に当てはまる。例えば、(7-8) の文の発話に意味論的な差は存在せず、その意味論的値は (9) のような形、すなわち存在量化によって表しうるのである。

- (7) I met a student with long hair.
- (8) I met the student with long hair.
- (9) $[\exists x: \text{student-with-l.h.}(x)](I\text{-met}(x))$

しかし (7-8) はもちろんその用法がそれぞれ異なる。例えば、もし話者が、一人より多くの髪の長い生徒に会っていたとすると、(8) の発話は偽とみなされる。単数確定記述は、記述を充たす唯一の対象について語るのがその役割だからである。そこで、L&S は語用論的な主張を提示することによって (7-8) の差を説明し、この統一的意味論を補完しようとする。L&S は、(8) の使用に付随する唯一性はグライスの協調の原理と会話の格率に基づいて導出される、と主張する。

大雑把にはあるが、どのように唯一性が会話の含みとして導出されるのか見ておこう。話者が (8) を発話したとき、その発話の意味論的値は (7) のそれと変わらない。すなわち (9) で表現されている存在量化によって尽くされる意味論的値である。(9) は話者が複数の髪の長い生徒と会ったとしても真となり、そこに唯一性の条件は存在しない。しかし、(8) を発話することによって、話者は

(9) 以上のことを伝えている、と聞き手は推論できる。というのも、もし話者が複数の髪の長い生徒に会っていたとすると、話者は複数形の確定記述 *the students* を使ったはずだからである。ここでの前提は、話者はグライスの協調の原理に従っている、ということである。協調の原理に従っているということは、会話の格率を順守している、ということである。なお、第一の量の格率は「言葉のやりとりの当面の目的のための）要求に見合うだけの情報を与えるような発言を行いなさい」と命ずる (Grice, 1975, 26)。もし話者が複数の生徒と会っており、複数の生徒に会ったことを伝えようとしているのならば、複数の確定記述を使うべきである。さもなくば、話者はこの第一の量の格率に背くこととなる。したがって、話者が協調の原理に従っており、単数確定記述を使ったのならば、話者は複数の髪の長い生徒に会ったことを伝えようとはしていない、と聞き手が推論できるのである。話者もこれを聞き手が推論できると想定しており、この唯一性が発話の含みとして伝えられているのである。

この L&S の分析は、もし正しければ、冠詞の有無を問わない言語横断的な分析となる可能性を持っている。上で見たように、日本語の裸名詞句は確定記述・不確定記述双方の役割を果たす。例えば (10) を見てみよう。(10) の発話とはある特定の生徒に関するものかもしれない。話者・聞き手双方が了解しているところの、例の髪の長い生徒に話者が会ったよ、ということ (10) の発話は伝えることができる。また、(10) は異なった文脈においても使用されうる。特定の生徒は想定されておらず、例えば、全校生徒すべてが坊主頭か否かを議論している際、(10) の発話は少なくとも一人は髪の長い生徒がいる、ということ伝えるであろう。

(10) 髪の長い生徒に会ったよ。

L&S の分析は、この用法の差を語用論的にとらえ、「髪の長い生徒」の意味論的な値は *a/the student with long hair* のそれと全く同じである、とみなすことができる。結果、冠詞の有無という表面的な差異にとらわれることなく、日本語の裸名詞句、英語の確定・不確定記述すべてに同じ意味論的分析が与えられるのである。もし自然言語の分析、そしてそれをふまえた哲学における何らかの

問いの分析が、普遍的な性格を持つべきであるのならば、この帰結は歓迎されてしかるべきであろう。

しかし残念ながら、L&S の分析には複数の問題点が存在する。ここではまず英語に関しての問題点を指摘し、そして日本語に関する問題点を指摘する。

L&S 分析の第一の問題点はグライスの会話の含みに関連する。グライスの会話の含みの最も顕著な特徴は、会話の含みは取り消し可能である、ということである (Sadock, 1978)。

(11) I don't want you to close the door, but it is cold in here. (Sadock, 1978, 372)

(12) ゼミの生徒全員が今日は出席している。#しかし実は、ゼミの生徒数人が今日は出席しているということはない。

(11) の後半の文を発話することによって、話者は聞き手に扉を閉めて欲しい、と会話の含みとして伝えることができる。しかしながらその含みは文の意味論的値ではない。そのため、(11) の前半部分のように、含みの内容と全く反対の内容を明示的に発話したとしても、文全体が矛盾したものとはならない。すなわち、含みは取り消し可能なのである。(12) の前半の文は、少なくとも数人のゼミの生徒が今日は出席している、ということを含意する。すなわち、もし「ゼミの生徒全員が出席している」が真であるのならば、「少なくとも数人のゼミの生徒が出席している」も真である。これは会話の含みなのだろうか。会話の含みであるのか否かテストするためには、含意された内容と反対のことを(12) の後半のように発話してみればよい。もしそれが会話の含みであるならば、取り消しが可能なはずである。しかし、(12) は全体として明らかにおかしな発話である(「#」を発話の不自然さをあらわす記号とする)。したがって、「全員」が「数人」を含意する、というのはそれがなんであれグライスの会話の含みとは関係しない。

さてL&Sは、英語の確定記述に付随する唯一性は会話の含みである、と主張するのであるから、これが取り消し可能か(12)のようにテストすることができる。このテストによってL&S分析の語用論的側面を検証することができるのだ。そこで(13)を見てみよう。

- (13) #Russell was the author of *Principia Mathematica*; in fact, there were two.
(Abbott, 2008, 66)

結果は L&S にとって残念なものである。確定記述 *the author of P. M.* が存在量化によって尽くされる意味論的値しか持っていないとするならば、それに続く著者の数に関する発話はまったく問題とならないはずである。しかし (13) にあるように、唯一性を明示的に否定するような発話は許容されない。したがって、唯一性が何に由来するものであれ、それが会話の含みでないことは確かなのである。

L&S 分析の第二の問題点は、これが複数の対象を取り扱うことができないという点である。これは L&S 分析を日本語に適用したとき非常に明確となる。日本語の名詞が用いられる際、その単複を明示的に区別する義務は存在しない。一匹の犬が吠えようとも、千匹の犬が同時に吠えようとも、「犬」が吠えた、と伝えることができるのである。L&S が提示したような、意味の対比を用いたグライス的推論は成立することがない。話者が、「犬たち」という語を使わなかったからといって、話者が唯一の犬のみを想定しているとは断定できない。「犬」という語は複数の対象にも当てはまるからである。

したがって、以上二つの問題点から、L&S による英語の確定記述・不確定記述、そして日本語裸名詞句の統一的分析は、少なくともその語用論的側面において間違っていると言わざるをえない。日本語の記述を考える際、ここでわれわれにはいくつかの選択肢がある。一つの選択肢は、L&S 分析を修正することである。L&S 分析の意味論的側面が間違っているとはまだ示されていないのであるから、われわれは、L&S 分析の意味論的側面は日本語裸名詞句にあてはまるとし、会話の含みではない別種の語用論的分析を構築することができるかもしれない⁶。この選択肢が抱える困難は、裸名詞句の確定記述的用法のみならず、(5-6) でみたような、英語の裸複数名詞のような用法をも、存在量化を起点として説明しなければならないということである。例えば、(5) でみたような、犬という種全体が絶滅した、という発話の内容を、少なくとも一匹の犬、という意味論的値からどうにかして導出しなければならない。もう一つの選択肢は、タ

イプ変換規則と呼ばれる意味論的な規則を導入し、意味論を複雑化することによって裸名詞句の様々な用法を導出することである。これら二つの選択肢のどちらを選び、どう具体的に発展させるのか、という問いは経験的な課題である。ここでその課題について詳細に検討する余裕はない。しかし、最終的にどのような理論をわれわれが構築しようとも、こうした裸名詞句・日本語の記述に関する研究は、様々な哲学的帰結を生む。以下では、そのうちの一つ、日本語記述の研究が文法形式と論理形式との関係についての洞察を与える、ということを主張する⁷。

III 裸名詞句と論理形式

次のような哲学的テーゼが、少なくとも一部の哲学者によって擁護されてきた⁸。

論理構造の決定性：省略のない完全な、どの平叙文についても、曖昧さが取り除かれた、その文の根本的な文法構造と機能的語彙 (*every* など) が、その文の論理構造を唯一的に決定する。

「根本的な文法構造」とは、統語論によって明らかとなった、文に付与されるなんらかのレベルでの統語論的表象のことであり、その統語論的表象の上では、作用域・束縛などの意味論に関する諸関係が明示的に表現されている⁹。

「論理構造」とは、文あるいはその使用によって表現される命題を持つ推論に関わる構造的なパターンのことである。たとえば、*every boy danced with some girl* という文の使用は、論理構造の異なる二つの命題を表現することができる。一つの命題は、すべての男の子がそれぞれ少なくとも一人の女の子と踊った、というものであり、もう一つの命題は、一人の女の子がすべての男の子と踊った、というものである。この多義性を説明する一般的な方針は、この文に二つの異なる文法構造を付与することである。それぞれの文法構造において、どの量化表現がどの表現を作用域として含むかが明示的に示されているとしよう。すると、二つの文法構造がそれぞれ一つの命題に対応していることとなるのであ

る。量化表現を複数含むこの文は、表面上二つの命題に対応しているが、実際は二種類の統語論的構造が存在し、その構造それぞれは一つの命題、すなわち一種類の論理形式に対応しているのである。

どうしてこれが裸名詞句の意味論と関係するのを見ていこう。上記の二つの選択肢を順番に考察する。まずL&Sによる意味論的分析が結局のところ日本語裸名詞句にあてはまったと仮定しよう。すなわち、(1-6)で見たような裸名詞句を含むどの文も存在量化によって尽くされる意味論的値を持つ、と分析される。もちろん(1-6)の用法は多様であるが、それらの差異はなんらかの語用論的分析によって説明される。ここで重要なのは、(1-6)の文がそれぞれ存在量化によって尽くされる意味論的値を持つ、ということである。(1-6)の文はそれぞれ一種類の真理条件を決定し、そしてゆえに一種類の論理構造を持っている。これにより上記の「決定性」テーゼが保持されるのである。これは当たり前のことと思われるかもしれないが、そうでないことは第二の選択肢を考察することによって明らかとなる。

第二の選択肢を採用したとき、裸名詞句の意味論がどのような形を取るかごくごく単純化して見てみよう¹⁰。第二の選択肢は、まず、(1-6)などにおける裸名詞句の現れになんらかの基本的な意味論的値を与える。例えばこれを α と呼ぼう。 α だけでは(1-6)に見られるような多様な意味解釈は説明できない。そこで一つないし二つ程度の、統語論から独立した意味論的値の変換規則を導入する。例えば、ある規則は α を β に変換してくれるとしよう。例にそって考えてみると、第二の選択肢は次のように説明を組み立てる。(10)における裸名詞句は、確定記述としても、不確定記述としても理解できる。これがどうしてかという、裸名詞句が α という意味論的値を持っているとき、(10)は不特定の生徒について語っていると解釈される。そしてもし変換規則が適用されたとすると、裸名詞句は β という意味論的値を持つこととなり、最終的に(10)は唯一の生徒について語っていると解釈される。

重要なことは、この第二の選択肢は上記の「決定性」テーゼと適合しない、ということである。変換規則に依拠した意味論によると、(10)は二種類の論理構造の異なる命題を決定する。英語の不確定記述が生むような存在量化命題と、確定記述が生むようなラッセル的唯一性を含む命題である。統語論から独立し

た任意の変換規則を使用するか否かによって、文全体の意味論的値がどちらの命題を決定するかが変化する。文の統語論的構造とその機能的語彙は命題の構造を唯一的には決定しないのである。そこには一対複数の関係性が存在する。よってこの第二の選択肢がもし経験的に正しかったとすると、「決定性」テーゼは成立しない。すなわち、ある哲学的テーゼの真偽が日本語裸名詞句の正しい意味論の姿に依存しているのである。

本稿では日本語の記述、裸名詞句について考察した。最終的に一体どのような意味論・語用論を裸名詞句に与えるべきか、という問いは今後の研究の課題である (Izumi, 2012)。L&S による確定・不確定記述の統一的分析を批判的に検討することによって、いくつかの可能性を考察することができた。経験的にどのような決着を迎えるにせよ、われわれ哲学者にとって、冠詞を持たない言語の記述の分析は重要であると最後に主張した。またさらに、われわれ日本語話者の哲学者はこの課題にもっと真っ向から取り組まなければならない。「犬」、「数」といった非常に単純な表現ですら、その働きに不明な点が多いことは上の議論から明らかである。そうした表現を使用し、なんらかの哲学的問いを日本語で考察する以上、われわれはもっとそれらの表現に対する理解を深めなくてはならないのである。

註

- ¹ 本稿は、2011年7月に行なった、哲学若手研究者フォーラムでの発表に基づいている。質問、コメントを下された人すべてに深く感謝したい。また、匿名の校正者と編集担当の方々よりのコメントがたいへん的確・有益であった。これも感謝したい。
- ² これはカプラン (Kaplan, 2005) に基づくラッセル解釈である。
- ³ 特筆すべき例外として (飯田, 2004) そして (Ludlow and Segal, 2004) があげられる。本稿では後者を検討する。
- ⁴ 私はラッセル流の量化的分析は英語の確定記述にあてはまらないと考える。ハイムが提示した指示表現としての分析が有望であると考え (Heim, 1991)。
- ⁵ ある自然言語の意味の理論がその言語の語句に与えるところのものをそれがなんであれ「意味論的値」とスタルネイカーに倣い呼ぶこととする (Stalnaker, 1997, 166)。
- ⁶ 飯田 (2004) はこの方針を取るとみなすことができる。飯田 (2004) は、L&S と同様に裸名詞句の意味論的値が存在量化によって尽くされるとする。そして「情報構造」という概念を用いて、その確定記述的用法を説明しようとする。
- ⁷ L&S 分析の他の問題点と哲学的帰結に関する議論は (Izumi, 2012) を参照されたい。

- ⁸ (Stanley, 2000, 2002ab, 2005; Stanley and Szabo, 2000) そして (King, 2007) を参照されたい。このテーゼは例えばキングによる命題の形而上学にとって必須である。
- ⁹ 近年の極小主義におけるレベルフリーの統語論を想定しない場合、こうした統語論的表象は「LF」と呼ばれる。スタンリーをはじめ、一部の哲学者はこのLFと論理形式を同一視する傾向があるが、それはまったくミスリーディングであると私は考える。
- ¹⁰ タイプ変換の詳細、そしてそれに依拠した裸名詞句の意味論は次の文献で議論かつ擁護されている (Partee, 1986; Chierchia, 1998; Yang, 2001; Tomioka, 2003; Dayal, 2004, Izumi, 2011)。

参考文献

- 飯田隆 (2004). 「記述について」 Available online at <http://phil.flet.keio.ac.jp/person/iida/>
- Abbott, B. (2008). "Issues in the semantics and pragmatics of definite descriptions in English". In Gundel, J. K. and Hedberg, N., editors, *Reference: Interdisciplinary Perspective*: 61–72. Oxford University Press, New York, New York.
- Chierchia, G. (1998). "Reference to kinds across languages". *Natural Language Semantics*, 6 (4): 339–405.
- Dayal, V. (2004). "Number marking and (in) definiteness in kind terms". *Linguistics and Philosophy*, 27 (3): 393–450.
- Dryer, M. S. and Haspelmath, M. ed. 2011. *The World Atlas of Language Structures Online*, Munich: Max Planck Digital Library. Available online at <http://wals.info/>
- Grice, P. H. (1975). "Logic and conversation". In Davidson, D. and Harman, G., editors, *The Logic of Grammar*: 64–75. Dickenson Publishing Co., Encino, California. Reprinted in *Studies in the Way of Words*, 1989, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts. Page number from the reprint.
- Heim, I. (1991). "Articles and definiteness". In Stechow, A. V. and Wunderlich, D., editors, *Semantics: An International Handbook of Contemporary Research*, Walter De Gruyter, Berlin, Germany. Published in German as "Artikel und Definitheit".
- Izumi, Y. (2011). "Interpreting bare nouns: Type-shifting vs. Silent heads". *The Proceedings of Semantics and Linguistic Theory 21*: 481–494.
- Izumi, Y. (2012). *The Semantics of Proper Names and other Bare Nominals*. Dissertation Manuscript, University of Maryland, College Park, Maryland.
- King, J. C. (2007). *The Nature and Structure of Content*. Oxford, UK.
- Ludlow, P. J. and Segal, G. (2004). "On a unitary analysis for definite and indefinite descriptions". In Reimer, M. and Bezuidenhout, A., editors, *Descriptions and Beyond*: 420–436. Oxford, UK.
- Russell, B. (1905). "On denoting". *Mind*, 14(4): 479–493.
- Sadock, J. M. (1978). "On testing for conversational implicature". In Cole, P., editor, *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*: 281–297, New York, New York.
- Stalnaker, R. (1997). "Reference and necessity". In Wright, C. and Hale, B., editors, *A Companion to the Philosophy of Language*. Blackwell Publishing, Malden, Massachusetts. Reprinted in *Ways a World Might Be*, 2003, Oxford University Press, Oxford, UK: 165–187.
- Stanley, J. (2000). "Context and logical form". *Linguistics and Philosophy*, 23(4): 391–434.
- Stanley, J. (2002a). "Making it articulated". *Mind and Language*, 17: 149–68.
- Stanley, J. (2002b). "Nominal restriction". In Preyer, G. and Peter, G., editors, *Logical Form and Language*. Oxford University Press, New York, New York.

- Stanley, J. (2005). "Semantics in context". In Preyer, G. and Peter, G., editors, *Contextualism in Philosophy: Knowledge, Meaning, and Truth*: 221–253. Oxford University Press, New York, New York.
- Stanley, J. and Szabo, Z. G. (2000). "On quantifier domain restriction". *Mind and Language*, 15: 219–261.
- Tomioka, S. (2003). "The semantics of Japanese null pronouns and its crosslinguistic implications". In Schwabe, K. and Winkler, S., editors, *The Interfaces: Deriving and Interpreting Omitted Structures*: 321–339. John Benjamins Publishing Company, Amsterdam, The Netherlands.
- Yang, R. (2001). *Common Nouns, Classifiers, and Quantification in Chinese*. PhD thesis, Rutgers, The State University of New Jersey, New Jersey.

(いずみ ゆう / メリーランド大学)